

決戦の大空へ

- ◆ 種別：DVD（映画）
- ◆ 監督：渡辺 邦男
- ◆ 製作年：1943 年
- ◆ 製作国：日本
- ◆ 発売／販売元：東宝
「決戦の大空へ 【期間限定プライス版】」DVD 発売中
- ◆ 価格：¥2,500（税抜き）＋税
- ◆ 時間：本編 91 分
- ◆ 音声／字幕：日本語



©1943 TOHO CO., LTD.

あらすじ

海軍飛行予科練習生、通称“予科練”の教育・訓練とそれを支え見守る倶楽部の様子を描いた作品である。生まれつき虚弱体質の克郎は、倶楽部にやってくる練習生との交流を通じて、自らも予科練生となることを決心する。本作品では、教育・訓練を修了するまでの予科練生の姿を、規律を重んじるような「硬い」イメージと、互いの失敗を笑いあうような「柔らかい」イメージの二面から表している。挿入歌「若鷺の歌」は、戦中において多くの青少年を魅了し、今日においても予科練を象徴する歌となっている。

シーン再現

隊長：お前、故郷にはお父さんがおられるだけだったな。

練習生：はい、そうであります。

隊長：お前が今日故郷に出す葉書に、お母さんも兄さんも姉さんも弟も妹も達者で暮らしとると書いてあるが、これはどうしたのだ。

練習生：倶楽部の皆さんであります。日曜日に遊びに行く毎に皆さんが親切にしてくださいます。自分にもお母さんや兄弟があるのだという気がします。嬉しくて堪りません。そして…そう思うと自分が命を捨てて守るこの日本が一層有難い国に思えてくるのです。

Chapter

1. タイトル / 0'59
2. 予科練習生 / 4'30
3. 空中操作同乗 / 5'04
4. 見学しとれ / 2'32
5. 倶楽部 / 2'15
6. 失敗談議 / 2'44
7. 口承伝令 / 2'17
8. 闘球 / 4'15
9. 行軍 / 3'23
10. 姉と弟 / 7'01
11. 一日の始まり / 2'25
12. 練習 / 3'54
13. 先輩 / 3'07
14. 思い出 / 2'06
15. 見学 / 4'13
16. 慰問袋 / 4'29
17. 元気 / 6'26
18. お礼状 / 2'25
19. 若鷺の歌 / 4'29
20. 合格 / 6'20
21. 応援しよう / 2'17
22. 爆撃行手記 / 5'22
23. 今日でお別れ / 2'07
24. 卒業 / 5'54



戦後に放映された『あゝ予科練』（東映、1968年）と比較したとき、本作品では「精神注入棒」（罰直に使ったこん棒）が描かれていないことに気づく。元予科練生からこの存在をよく聞く筆者は、特に違和感をもった。かつて丸山真男が近代日本あるいは軍隊の精神構造を「抑圧の移譲」と枠づけたように、軍隊内部

の抑圧・暴力は隅々まで行き渡っていた。しかし本作品にはそのような場面がほとんど見られない。むしろ教官と練習生あるいは練習生同士の「思いやり」が感じられるばかりである。もちろんここには予科練募集という海軍省の意図が看取されるが、それと同時になぜこの映画が多くの少年を惹きつけたのかを考える必要があるだろう。

1900年代に入ると初等義務教育への皆就学がほぼ達成され、1920年代にはほとんどの子どもが卒業を果たすようになる。それと並行して高等小学校への進学率も上昇するが、中学校への進学率は依然として低いままであった。つまり、学校に就学する人が増える一方で、多くの卒業生は上級学校へと繋がる中学校には行けなかったため、経済的・社会的理由によって進学できない少年たちの不満は膨らむばかりであったのだ。そのような状況のなかで、予科練は1930年海軍省令によって制度化された。第1期の志願倍率は約74倍であり、桑原（2006）の調査によると、就職先の軍隊として予科練を捉えた者もいるが、進学先の「学校」として予科練を位置づけた者も少なくなかった。海軍省は、1920年頃に「航空学校」という名称で少年航空兵制度を構想しており、その後の予科練にも「学校」としての色彩は残されている。そのことから、予科練は進学先の「受け皿」として機能していた可能性が挙げられる。だとすれば、少年たちは予科練内部で「厳しい」ことがあるのは分かりながらも、意識／無意識に「ユートピア」として予科練を描かざるを得なかったのではないだろうか。

「戦争がなく平和な世界がよい」。若者を含めこれを疑う者はほとんどいないだろう。しかし、31歳フリーターの赤木智弘は、今日の「平和」による社会的抑圧を嘆き、社会を流動化させる「戦争」こそが「希望」と述べる。なぜならば、軍隊であれば丸山のような東大エリートも「ひっぱたける」、換言すれば今日の格差社会をひっくり返す可能性があるからだ。今日の「平和」を考えるためにも、「希望」としての予科練を映し出した本作品から多くを学ぶべきではないだろうか。

「希望」としての予科練から「平和」を問う

Information

【参考文献】赤木智弘『丸山真男』をひっぱたきたい 31歳、フリーター。希望は、戦争。』『論座』140、朝日新聞社、2007年。桑原敬一『予科練白書』新人物往来社、2006年。丸山真男「超国家主義の論理と心理」『世界』5、岩波書店、1946年。

【関連機関】土浦海軍航空隊跡地（現阿見町）には、1966年に予科練の碑、1968年に雄飛館（予科練記念館）が建てられた。2010年には、予科練平和記念館が、阿見町行政と海原会（予科練の戦友会）を中心として設立されている。